



俳諧

猿故入五百題

下

5
1181
2





古今

續五石題 秋之部 目錄

初丁 月見

名月 兩

待宵

文月

七夕

願ひの糸

さうぼろ

蓮飯

おぼろ

さきまう

捨らち

一月

十六夜

葉月

立琴

干葉盆

おろり火

墓詣

西瓜

種風

初あけ

若月

右月

葉月

銀河

せつごい

鬼おろり

生月魂

初火

月八

三日月

龍田姫

さるる秋

かきふたの格

高灯籠

初経

盆の月

残暑

あき置

二

五

五

六

七

八

九

十

十三

三

五

六

六

七

八

九

十

十三

四

五

六

七

七

九

九

十

十三



霧	十二	霧	十二	後の救入	十三	二百十日	十三
種妻	十二	野分	十四	早稻	十四	落穂	十四
木綿丸	十五	田刈	十五	晩稻	十五	司召	十五
逆峯入	十五	後徳家	十五	夕の潮	十五	八朔	十六
釣ひ久	十六	あま牽	十六	放生會	十六	かゝ	十六
鳴子	十七	引板	十七	落し水	十七	洪船	十七
差船	十七	夕の鮭	十七	崩祭	十八	懸	十八
河麻	十八	沙真	十八	弁市	十八	新とは	十八
持衣	十九	漸寒	十九	朝を	十九	夜寒	二十
あし酒	二十	雪耐ふ	二十	秋の雨	廿一	穰空	廿一
秋の霜	廿一	長き物	廿一	秋の暮	廿二		

植物の部

材	廿三	葡萄	廿二	梨	廿三	善たを	廿三
一葉	廿三	柳散	廿三	草の花	廿四	女郎花	廿四
木樫	廿四	葛の葉	廿四	菊尾草	廿五	蓀とうは	廿五
蔓珠沙那	廿五	男刀	廿五	あさかほ	廿五	芙蓉	廿六
海棠	廿六	我木瓜	廿六	萩	廿六	萩	廿七
蕎麦花	廿七	稲の葉	廿七	番椒	廿七	糸瓜	廿八
夕の露	廿八	蓮の実	廿八	蘭	廿八	いせ秋	廿八
花野	廿九	桔梗	廿九	鶯	廿九	紫苑	廿九
舟きく	三十	あしきき	三十	雞頭	三十	蓼の花	三十
稻	三十一	薦穂	三十一	尾花	三十一	葉	三十一
未枯	三十二	かき瓜	三十二	葛	三十二	梅の葉	三十二
ゆき	三十三	芋	三十三	河川菜	三十三	刈萱	三十三











燭	三十一	榻	三十一	炭竈	三十二	炭	三十二
炭賣	三十二	冬の月	三十三	寒月	三十三	寒聲	三十三
冬の入	三十四	雪垢離	三十四	臘八	三十四	臘	三十四
霜かけ	三十五	冬日	三十五	冬夜	三十五	風吹	三十五
節季の	三十六	煤拂	三十六	餅搗	三十六	夜配	三十六
年の市	三十七	節分	三十七	厄ちり	三十七	格き	三十七
冬忘	三十七	行年	三十七	年の歌	三十七	流る年	三十七
春待	三十七	岡見	三十七	とら龍	三十八	大海	三十八
年の暮	三十八	年内春	三十九				

都而百四十一題

四季合六百拾七題

古人續五石題發句集

穂之部

月子金今宵一漏かり後をし 宗因  
 名系りのともく是れ秋の月 守武  
 冬月小簾のまゝりや田のくろを 芭蕉  
 今宵は月小毎へかけこころん 来山  
 めいなるや居酒のまゝんと頼かふを 其角  
 月と山の今宵ふ別てゆゑとらん 鬼貫  
 冬夜のまゝりやの月や三五良 玄圃

名月



名月や折の枝とそら吹く  
めいさつや海もあつとゆもこゑと  
ちよら麻よろかの名月まこ聖の月  
名月や車まきしらとけ番家  
めいさつや土手のつれのみひた藪  
随分とはしも土のりりあは月  
名月やまこしと歩行草の中  
名月や鞍の声と大のちを  
めいさつや志とねとさの朝あけ  
更くして鞠垣とこけふの月  
名月や今日とあきつる秋の昏  
めいさつやまきのふの雨は菜大根

嵐堂  
去来  
心尺  
夫草  
浪化  
路通  
傘下  
二水  
野坡  
言水  
支考  
夕可

名月

名月

名月や虫とこころよもさくら  
めいさつや碓うちほ波のさき  
名月やほのそあつる日次とあ人  
焚くてし籠も困けしあつる月  
名月や里の白ひの青い柴  
名月やまきとあつて虫体をしら我  
めいさつやまらしく鶏は俄まき  
名月のこれもかくみや菜大根  
名月やまきとあつて穂を知と竿とあれ

若  
山  
足  
幽  
枝  
童  
化  
大  
那  
本  
本  
本



月見

名月  
西

月見とる所もわづらひき教もほ  
月えせん伏見此城のまきと都  
るやくと坊へおし込む月えれ  
隈もなき名もなき京の月え我  
さしきよて我舟さして月見く有  
繪もなき菴の門の月見えうお  
あきかな月見出く来る月え此  
侍も安ふなるは月見の那  
とり火やおのれうほなほ西の月  
ふれとて宵くらふ麻くあは月  
冬月や西よとてあふ風光を

芭蕉 去来 唐介 意情 浮葉 網梨 利牛 史邦 鬼貫 西相 犬草

秋  
宵

月

秋  
月

我糸あつて我小ふんせり月我新  
中ととて東風とつやうまの月  
隣より破風のかりらる月我我  
江の月や深み浅くの蜷のら  
けうとさふおしと死ゆく月よ  
かろくと簀のらり月夜の系  
子火抱く湯は月のそくまうと我  
おかしけお巻でなうあれ月あうれ  
ととすても見通を月は野中うら  
月のなうれ中らふさしきも晴曇り  
京氣紫去来は月とる傍中間  
種とりの月よ鳥のらもつく

素堂 其角 仙杖 鋤立 昌碧 梅舌 北枝 一髮 長虹 万平 犬草 鬼貫



初月

三日

月

待宵

初月のうらふ強かり一雁のさゝ  
 せん月や物は香さめる宵の宿  
 蜻蛉は寝ひき門する之日の月  
 電のまじりてのこぼる三日はつき  
 三日月や柱おそわれ高燈籠  
 はく穂をまけて出たり三日の  
 三日月の数ふ道のはまぬころ  
 待宵や翌を二見へ道老こま  
 まのよひや流浪のふけ秋のそら  
 待宵はよる賞せそや年のやと  
 まのよひや翌の連舟の表せん

言水 移竹 其角 文鳥 銭芷 李由 万声 支考 惟然 牧童 素堂

十六夜

うらふなまの跡月待宵の興  
 待宵やまはくしある糸の妻  
 十六夜もよと更科の那の糸  
 そらうらや十六夜よての二女と  
 りさよひや新眼はうまあも  
 十六夜や有馬成物かくは人  
 りさよひや聖田るりる神明講  
 十六夜はけしき分るり比良侍吹  
 りさよひや眠れまもなれ泊り五位  
 りさよひやささくたさくや宵の秋  
 りさよひや家生の定ひ人小照

乙由 芭蕉 末山 其角 許六 毛純 汝村 野塔 洒堂 乙由



後の月

らまよきふねらるる後月の十三夜  
海山成おほえを後月の足く那  
百葉は香成あめてや後の月  
影ふこよたふねはとるる月夜成  
後の月まよこめはとるる秋茄子  
と大の松風さふー後の月  
後の月入るるかひより星は空  
穂のふ高底もありのちの月  
寒くくひの巨燧もあるる後の月  
月とち体袖と木の葉の十三夜  
草も木も此國ふりや又の月  
酒はまよて時のもよもや後の月

素堂 去来 酒堂 杉風 杏雨 野坡 鬼貫 游力 斜嶺 重春 全暇 長父

龍田姫

文月

葉

菊月

くまなるのふき名とあれ龍田姫  
うかまよはりの顔ひやとるる姫  
文月や法成感とる敷やのち  
かまよくくるる菊月のわくろく  
八月も下とてあつー赤とんほ  
野も山も露とるるあねと月  
あつうま九月日和や敷の照り  
長月やらとるる苗とるる水とるる  
葉月のはらみうあやし空の星

和及 昨非 其角 良徳 指筆 李雲 水魚 尺牘 良徳



初種

しら秋や海も青田の下みとり  
初種はとれり露からあらのほろ  
種とらや朝日ほほけしあまみ  
鱧まふとややはら秋の日数哉  
しら秋夜かうとえとらんおもれ  
海山のうろろくそりやと胡の煉  
秋まねとおととるけさやまきみり  
あきとらや星も居るとわ夜羽風  
笠林の雀種とほらとれり那  
海風もまことよめくとらりな  
山水やまこと初あきの香蕩散  
あきとらや鷹のとや毛のさし然

芭蕉 鬼貫 卵七 去来 荊口 風囀 野鼓 林旭 杉風 支考 句空 浪花

七夕

七夕や梵論ほひとて笛を吹  
けり合ふ我妹かきん待か郎  
幼きなれたるなせりとや星の床  
七夕や箱のまあちかからとら  
土佐う跨ふあふのく人や星あり  
酒盛となうとて酒のいりひりへ  
七夕よかき終ふらうと一指合羽  
不し合や離別の中次まひてえん  
七夕や馬さうまもたれ川の端  
七夕を笑めて流るると一居るれ  
ま琴やよるの志ふらる虫の声  
とてとらやと千人小蟲ととら

其角 嵐香 曾良 野坡 支考 去来 杉風 山峰 銭止 教童 可風 希因

ま琴



銀河

鶺鴒

糸の糸

荒海や伎倆小横よふ天の川  
 くれやまぬ一夜よ糸も此川  
 西風の南ふかやあまのめと  
 ちり知を別色のくもや天乃川  
 五位の声まうふふね天の川  
 あまの川めきまふりてもこれに  
 かきたのどくや繪入の百人一首  
 鶺鴒や石火おりに此格もあは  
 くてすのほ糸や移り糸すた  
 七夕や糸の移り此糸の糸  
 糸すまのく類ひの糸も白たより

芭蕉 嵐雪 史邦 八菊 汶村 宇路 許六 其角 立圃 一温 蕪村

于蘭盆

撰待

高燈 亀

于蘭多や好くくまり糸の原  
 盆ふぶねとけの中は佛の自  
 川並や盆挑たをまはれ中  
 のけりのもなりても盆一盆も  
 盆の柱もて人松のかさ  
 撰待よ糸はこをれ西へ行  
 せんとのや往來と糸をよけ  
 人兼と消く糸を燈の亀  
 子以捨る長者の門や高とら  
 糸の燈の龍を糸の糸の糸  
 ころころ松の木は間よこ糸の那

柳 賢 月 溪 三 朝 三 釣 堂 魚 村 撰 良 言 水 百 里 北 枝 長 皿



燈籠

美女美男灯籠いともか照る心  
天も花も酔て何月の大とくろ  
父母の教灯籠海舟ぬまろり  
灯籠のこゝろもありにてまかじ  
灯籠の三度のけねゑなごころ  
とけしつゝ風も消さるゝ切替ふ  
灯籠小舟の長者も出づ歩行  
おろそ火も終ちぬおと移るお  
送りの火もよろほ足のおみらら  
おくりのけし山よの月もや家の敷

さ角 宗因 由之 紋江 蕪村 左次 龜荒 魚翁 元孝 小卓

送火

魂祭

船の穂れ果とらうりけ魂とんり  
多生とらうりけ果の妻戸の枯ら何  
鬼明やぬと血もぬれぬかあるく  
をくと女もろくゝぬ室や魂もろく  
炎して啼しもぬもろくぬはのり  
草の多め風のとぬもろくぬあり  
魂はろくもろくゝ所をかくゝえろ  
そろくもろくゝ名もろくゝぬまろり  
たほすのり宿や入相常なぬ  
魂もろくもろくゝぬをかくき白ひぬ  
山伏や坊やを申もろくゝぬもろり  
とぬもろくもろくゝぬもろくゝぬ

芭蕉 嵐雪 鬼貫 如足 史邦 西寅 西柳 卓袋 調祈 百星 沛圃 越人



桐経

蓮飯

鬼子つて味つた山の木の葉の葉う那  
ふまはつてさき、さきまふまきり  
魂ふあり門の三食の祝ととん  
待さうの隙あやあられうぬあり  
林の子け好もかうて鬼よつて

桐経やこの曉の闇御経み  
とな経や世おほつつあつまを

文月やめえそく炊く蓮のわ  
朝飯ふあて舟のことよととの飯

湖水  
未山  
其角  
希因  
乙由

其角  
燈外

季吟  
里山

墓

結

生牙

鬼

盆

の

とくも孫子とまりて墓まあり  
銀を罪のこりやとるはめり  
夢あよく似くはあを墓まあり  
うらけく戸家のうらふ墓まあり  
三浦あ九十一と結やけつはあ

かけ花や生精まの袖おつゆ  
ゆきけは者所のりれととぬ  
受うと死牙とよ後とて生牙魂  
淵明う隣あつめやうき牙なよ

かしてても焼火くふしととの月  
おり経と鯛おきりの盆の月

去来  
其角  
嵐雪  
卓袋  
乙訓

一鉄  
彫棠  
百里  
其角

蝶羽  
舎帖



躍

踊る子やも町互ふけむら  
をとり子よめをの畠の草ゆえん  
川と舟成とめて江口の躍う有  
おりのくそと組小泳くはとりうれ  
食の湯の汗丹出くる踊う素  
けいせん此行臭くなれ踊我

宗因  
去来  
肅山  
尚白  
李由  
木導

西瓜

ふくしとても公れをれね西瓜  
身知しつをりてあつる西瓜我  
裏店や西瓜ふなうる物の本  
猪の鼻くそと法くそ西瓜う那  
そくくそ西瓜切り秋の風

歌川  
嵐雪  
曲翠  
卯七  
陽和

火

小をこいと火の音は割る音  
おのうきまひ夜更で涼一火舟  
西雲の遠いよりえり火舟舟  
追出して千秋楽おもろ火舟舟  
舟のくよ火火かそれれ涼を舟  
ららの戸の火舟舟トて火舟我

其角  
且水  
つふ  
附風  
笑控  
序令

残暑

ひやくと壁をぬきとて昼森の  
朝も秋夕も秋のあつさう那  
残アとるらねるやとの暑あき  
下草此あつら残るあつさ我  
行へものらけりかられる残暑我

芭蕉  
鬼貫  
遊力  
李由  
眞素



# 相撲

雨降しと夜をまて寝る角力取  
 上よりと名も徳兵衛より相撲丸  
 駕うさやとこのまをふの取おくれ  
 角力と伝あしと波とと砂場う郡  
 投ふれて笑教中にしれをまふふ素  
 小相撲のまきまき、猪や藪ちうら  
 お撲るのこころ小著るり蛇の声  
 なげはる小灯の籠うちけと角力死  
 初秋下親しむる道一すまふふ  
 おもさる小物うちまくる角力死  
 山くけのま、天よりしくとるまふふ素  
 小さくふとつらひま名も角力死

許六 其角 甫山 龜翁 勝定 尚白 木導 朱袖 米恋 春幾 盛弘 秋之坊

# 風 繩

秋風や藪もとるくも不破の園  
 あられけりまことほりくよは秋の風  
 雁り木の糸をゆるるもあまはるせ  
 十圍子も小粒になりぬ秋乃風  
 ぬらぬと跡ももまをあはれ秋風  
 雀子は鬚もらぬや秋のうせ  
 焚くその食はむほひやあはれ秋風  
 さとさつとや繩よく風のたぐひ細  
 張壁よ何とまよりは秋のうせ  
 草とりの裏めつらとあはれ秋風  
 木の股ふちけく鳥や繩のうせ  
 さやかくと名をあやはらて秋は風

芭蕉 鬼貫 嵐雪 許六 初候 式之 李由 四睡 程也 北枝 曾良 沙明



早稲の香風ゆり揃へるの燐の息  
秋風や我と板戸はひひくおと  
輪義のゆりのあふ海や秋のひま  
秋うせや二りあふふこの証させ付  
あきうせやまご四五尺は杉乃先  
秋の風ひの音くあつせさう  
夕くほの實どかこあたりあきの風  
あき風をことしきまの子うも吹  
冷酒を止まらまきしあきけり  
あたりせお耳の垢しは涙し守  
秋風や草を食れく馬の鬣

湖雀 岩翁 毛純 游力 汶村 乙列 卧高 未山 言水 去未 希因

月入

扇置

捨團

初嵐

風ふ月の入夕の久月のあふし  
あふしもや秋空高くあふ日  
あせとても常はあ燐のあふき  
あ書もつとるはりのあふれ我  
添草の秋も仕入れる團扇のあ  
捨うらふねしあてあふ窓のあ  
あふあふしあとも青し栗の毬  
初あふし一鬼は毛並あふり  
あさ晩の膳あふあや初あふし  
あさあふしとあふあや初あふし  
あふあふしとあふあや初あふし

負室 百人 横愁 宗因 嘴角 浮流 芭蕉 看深 塚項 野坡 治德



霧

露

霜

雪

霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯  
霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯  
霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯  
霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯  
霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯  
霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯  
霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯  
霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯  
霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯  
霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯

素堂 鬼貫 末山 言水 其角 之白 荒弾 雪芝 西邑 千子 蕪村

霧

霧の  
霧入

二百  
十日

霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯  
霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯  
霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯  
霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯  
霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯  
霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯  
霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯  
霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯  
霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯  
霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯 霧のうらみ 釜の湯

其角 遠哉 楚常 苔翠 毛統 野経 舟行 素堂 李由 葛下



稻妻

あの雲より稲妻と待たふより  
いさばあふふ大佛拜む野中の南  
稲妻はあふふ入るくまじき空  
のまはるのくまじき空や山はく  
稲妻はあふふ海のおりてをひく  
のまはるのくまじき空や山はく  
稲妻はあふふ馬のくまじき空  
のまはるのくまじき空や山はく  
稲妻はあふふ折のくまじき空  
のまはるのくまじき空や山はく  
稲妻はあふふ折のくまじき空  
のまはるのくまじき空や山はく  
稲妻はあふふ折のくまじき空  
のまはるのくまじき空や山はく  
稲妻はあふふ折のくまじき空  
のまはるのくまじき空や山はく

色 蕉  
野 兮  
上 草  
史 邦  
洞 梨  
水 花  
湖 風  
幽 子  
卧 高  
素 洗  
孤 白

野分

ゆくへたつき雲小組く野分く  
日枝高く吹かき候く野分く  
まよふまよふ白ちりく草の野分く  
舟分くく雲のくまじき空や山はく  
るるささのくまじき空や山はく  
おのくく草のくまじき空や山はく  
鏡持のぬりまのくまじき空や山はく  
くはやくまじき空や山はく  
冷くと朝日くまじき空や山はく  
鶏の尾おはくまじき空や山はく  
河奴そおはくまじき空や山はく  
吹くく野分くまじき空や山はく

未 山  
言 氷  
立 志  
探 志  
止 秀  
圃 菜  
琴 友  
柴 友  
支 考  
前 日  
園 水  
之 順



早稲

穂

早稲の香やふりたる 衣衣有破海  
早稲の香やふりたる 衣衣有破海  
早稲の香やふりたる 衣衣有破海  
早稲の香やふりたる 衣衣有破海  
早稲の香やふりたる 衣衣有破海  
早稲の香やふりたる 衣衣有破海  
早稲の香やふりたる 衣衣有破海  
早稲の香やふりたる 衣衣有破海  
早稲の香やふりたる 衣衣有破海  
早稲の香やふりたる 衣衣有破海

芭蕉 去来 牧童 支考 松嶽 自室 丈草 鬼貫 荻村 青角

木綿取

田刈

晚稲

後うや琵琶小あくさひ林の裏  
箕小やして窓よとらふく治は桃  
里の子と鼻よふし急ふ木綿取  
新くくやうより散くあやむと  
日あつりや治とりのまうとを藤まきと

芭蕉 孤屋 湖水 泥燕 富豆

稲刈やその田のそくやあま所  
はらぬ足の跡のみまき一刈田系  
目ふるる一稲刈未はは調系

許六 何之 豫青

晚稲田の穂たるうつや奉返り  
あつとして案山子ゆらける晚稲水

遠水 蝶夢



侍るさ  
召

らうみ箱さのかくさる戸司召  
拜ととして鳥帽子落さる司や

山店  
太祇

逆峰入

七多積る信都かけり逆の峯  
山入や雲をまふもよ喰ちるを

淡く  
波上

後彼  
峯

彼峯さくら火の月こそ西よあま  
風もなれた秋の彼峯の後月し

宗因  
鬼貫

初潮

初潮や細いところ流す帆うけあ流  
ら川ちほも驚くけるた儀亦我  
けり波や小松の中月月の新  
秘しちよ追りれてのちる小魚我

嵐蘭  
和及  
乙河  
蕪村

八朔

八朔や二日の目とまことこれとと  
八朔や牌は徳はつた横くく  
八さくや桂は舞はれまどりの色  
八朔や踊つて足なかくとすれ

宗因  
乙洲  
野坡  
乙由

約  
迄

寺くや清あかろあるとぬむ  
るりや中る函谷やうふ新馬途之  
菅さまやこころ目おころり駒ひ  
約らうひらとよゆくや額ふ

口齋  
其角  
秀風  
蕪村

駒  
牽

駒牽の末号や出ぐん三日の月  
京のまも皆らほおきの度りま

去来  
浪花



放生會

うねりけふ鰯魚とるまの放りとて  
海老箱も実入りの頃とや放生會  
人ともをきとねつありの魚とかな  
先いさる鯉ふ達へとやとねり鳥  
はまのいとらふ案山子の腰刀  
はつありと刈らる詠のかたしうね  
えもさうせの出来ふてたあのかし我  
山越々案山子ほらりて笑ひたり  
あつ人もかりてけうはかかしの那  
物け音ハあ吞心癩とかたしうね  
よゝあゝ代らうてとるま案山子丸

桐雨 史邦 鬼市 去来 諷竹 重五 惟然 雲口 光山

案山子

そのまゝを後田守らわかのとらる  
世の中にくえて弓とる案山子うね  
下夜さもゆかりて森せぬうしうね  
あつ人もかりと山田のかし時西きん

全案 卯七 和角

鳴子

鳴子曳二日の月もらうらう那  
七十のくもそととるりる子ひき  
是酒の顔々門田の鳴子ひき  
なる子引おのう是をよしうまね

言水 其角 野坂 乙由

引板

山はくき日の出れ虹や引板の綱  
中まは陰や誰呼子とるひくこね音

電翁 蕪村



落船

村への森らうろふねかとりて  
小山田のうろ落を日やねとて

世村  
左 祇

浪船

表のいと市とる船の暮のまひ  
浪船やいのと栄れ夢のとも

杉 風  
寛 満

落船

落船の水よあうはうれ世うふ  
追落を船のよとみや石のおと

勇 松  
横 儿

初駐

駐の附宿と豆腐れ兩夜 名  
ちの駐と浪居も客としりあ  
まけおんてき波のくる川辺う  
る河駐や少福て荷の宿るふ

素 堂  
泉 玉  
岡 木  
祐 徳

崩築

ぬくくと煤のゆくとやうまき築  
そのまきの奥ふはとやうはれ築

太 祇  
野 坡

すゑ

むら雲や雨とまよふは懸はり  
まじしさを府家より船とまう船  
せいと船のあもあうしと船船

昌 長  
半 残

河鹿

あやまのてきまうおとりの河鹿う  
あままははれてなきあさか

嵐 崇  
因 友

沙奥

袴のまうと色船をこと非まう有  
粕買の駒りまうや流は沙奥  
四の手舟を世買まうん月見川  
沙奥はりの小舟漕たれ窓の茶

巴 山  
朝 豊  
菰 白  
蕪 村



升市

二ッ買欲をおもく一升の市  
むろくえし遊女小達ぬ升市  
市の月々つ六九合の月もな

一 鹿  
作者如  
涼節

新市

新そはや夕鐘修吹をまふそ  
あん蕎麦や名をきて通は唐辛

支考  
夏晴

砧打く我ふきうせよや坊々法ま  
おりのあまふ遊る名をうら礎うお  
相楳のふらふて咽るまをこつ有  
まふと打人も縹くうまればけ  
を少掛の糸うりをさきまをまねこつお

芭蕉  
鬼貫  
山川  
鋤立  
去来

擣衣

夜

鼓中らきぬこきうたのあめのおと  
つら馬は拍子あつと砧砧の素  
蔭かふとて遠くはるのふるまぬて成  
旅人か村とことろと砧あぬとつ有  
との法うりなつさみふら川まぬと成  
山里の砧やさふく啼くまうり糸  
生柴をちようくさせてまぬとつ有  
辰まふ起く酒のむまぬとつ有  
さいしきふもまぬとつ有  
らるあもかふらぬ市のまぬと我  
糸うりはく現母つよまきまぬと成  
三日月の殺は道のぬ徳のり有

仙化  
巴風  
破笠  
全峯  
一 笑  
是吉  
千川  
昨 應  
孤舟  
立志  
七里  
万声



漸寒

中々一早霜吐しんしの角芽立  
足らぬき朝戸はあつやや寒とて  
中々いしく人をうらうらふ程をとう赤

野童  
北枝  
乙別

朝

寒

朝さうやふとりみそめて葉の花  
あさきとみ酔のまきねよつとを  
初寒や園のむくまきのひくくき

風介  
北枝  
蝶後

病人と陸木は麻うね我きう糸  
落しは髪ぬのうさるる夜さうう糸  
松うせの新酒をさまこと我き我  
子く等ふ猫もあつとよき水

本草  
許六  
支考  
其角

夜寒

泣く夢さめてよと泣我さうう糸  
あつてもなまきるを夜寒のありひうれ  
榎は葉のいろりよるる夜寒う糸  
まこと一毛菰くくまての夜寒うれ  
我きさや蒲堂ととふうれり  
客人の夜寒おしける我きう糸  
打鍼は音やよさうの障子と  
まことの里を川う我きうの火打我  
欠くて月もなぐるる夜さうの南  
木はくくふ鼻紙あつる夜寒う糸  
生壁と袖を氣はくう我きう糸

末山  
諷竹  
香川  
仙化  
百里  
程巴  
汀芦  
其流  
蕪村  
風麥  
李由



新酒

新酒の瓶をくそおりの明石米  
早稲酒や稲葉よしの生を焼くりと  
風は名の付く吹よりあんな酒うね  
秋さけはあつても青死月よこの春  
子稲酒や禿倉ふかけし牛の角  
新酒をむ少をまらなり砂はうへ  
松の葉も紅葉とまらりて秋酒を奈  
袖はまふりつはし雲や露志くま  
菊の香けりのよはく日や露時雨  
あ乞のしややとらりて露しるれ

宗因 其角 西花 虚谷 亀翁 諸九 嵐雪 希因 凉帝

露時雨

秋 煉

秋 空

秋時雨や御殿割るまこの錯落し  
さらさらくくさうね庵く秋の雨  
煉のあめ鶴は尾のまらりまらり  
松のあめ地まをまらりまらり秋のあ  
あまらりあやまらり底のまらり踏雁も  
秋はあ胡弓の糸よまらりあまらり  
穂のそら尾上の秋ふくおれより  
渥け木のまらりまらりまらり秋の香  
糸まらりあまらりまらり走馬や秋の香  
風の根を照はけまらりあまらり空  
上ゆくと下るるまらり秋のそら

秋風 吹雪 楓葉 文草 草村 曉亭 其角 支未 大草 卯七 凡兆



種  
相

長  
夜

芭蕉心もやまこせつるは秋の相  
うと赤き露のかしらやあまの志り  
九度絶つとも月桂七ッの事  
あつき夜を病氣知ゆりて換露れ  
おとまりの長き夜外にとこの心  
柔のこねおもひなり一猿はこを  
くつこめをこつて我長きはくつ  
粟稗を夜長ふらうん秋三月  
腹よりておろり秋や萩の声  
なつた夜をおしお成るる源流外  
おつきとやや蜩の声も長根外

芭蕉  
更明  
芭蕉  
虫貫  
北枝  
沾徳  
野徑  
怨誰  
草土  
蝶年

殊  
の  
暮

この道へ行へるふ遊はるは  
あまは暮祖父はあつり三ッの心そ  
舟多はほ名金の秋は夕暮る形  
癖小かりてら且下や秋の今時分  
よと従身尋ふ心よりの秋の心  
夢の穂やひよりこあれと秋はる  
あまのくれらよくかきくるる  
馬牛は脊もさうさうれ一鶴の昏  
夕らう袴へし何もあねとも秋は海  
あまの冬る苗もはくつれてほり  
人を住居をよりすこや秋は昏  
秋はくはるる合もなり一舟遊山

芭蕉  
其用  
嵐雪  
千春  
玄梅  
徑已  
荷兮  
松翁  
園友  
山店  
楚常  
紫紅



柿

昔サト今中らうはくあきのくれ  
種くまうくまひしき炭の白いふれ  
石切の音も夕暮り秋れふと  
谷川や茶袋こくあまのきる  
僧の居は總のまねよ秋の昏  
鳴涼よあきくもかからと種のとれ  
柿ぬしや梢と迫るあくしや  
帯落の枝は音まきゆんら  
泊柿や障子小ねふ夕日つけ  
柿はるるりしを子供ゆりのとと  
候神のつらまて枝の住居のま

鬼貫 昌碧 季下 益音 不炊 車庸 去来 素堂 丈草 利牛 龜翁

葡萄

菊

梨

若良

月日れ栗氣葡萄のつる甘露のり  
酒作は若の法はまやふたう州  
柿はくまをくめ淋しき葡萄うれ  
さうゆのぬかう人まうるぬさうの船  
今宵うる梨の帯とく男部を  
音梨やうゆゆのうせん秋の水  
かけくまを小玉別あり若烟叶  
過くく市日ふれさうりあふを粉  
若たをを既ふ一まくの灰と形り  
唐蝨く下を床しきまをこつな

其角 史邦 仙老不知 打睡 沽德 日幽 龜翁 晚山 龜世 若良



一葉

水の端一葉あふちかくおしきき  
ある秋のきりまふころの  
角文字の桐の落しは二を  
桐のまゝや落るころを  
庭掃くそはくひくると  
庭をいして出たや  
月と何折ちり残る木の  
主すの妻の用意や敷り  
行馬のまゝあもち  
さひくまや飛井殿

具角  
とて  
甘泉  
苔蘚  
風徐  
芭蕉  
素堂  
桃隣  
李東  
嘉中

柳教

柳の  
花

女  
郎

七草小雛味増のうまて秋の  
柳の気ちりて老母の  
秋條一人切去る草の  
早ふ花然ゆはとかりに  
我うちよ笑ても  
ゆらんうよ西は後の  
けふはの賀もあや  
女郎気あるところ  
松風の里小汐くちを  
はやくと露けし  
かとうのあを

言水  
東滝  
風園  
曉臺  
五流  
鬼貫  
杉風  
野童  
茨口  
乙州  
秋之坊



木

槿

葛

道の邊に木槿を馬ふ喰れり  
むくけ垣をえぬくま麻入る  
たぐまくと木槿のふけま  
川音や木槿さう戸のふり起  
はくまのぬ里は木槿の白ひ  
つくま草紙やまはひけ垣  
の間の間ふ脊戸の木槿ハ  
手はくま色の龜は常や木槿垣  
布小葵てあまのりまさう  
おちりた谷をかこまや  
散うてふ花もうみぬ葛は西

芭蕉 観水 土芳 北枝 四睡 素牛 如柳 見壽 泊徳 桃隣 北枝

嵐尾

糸

藤袴

蔓珠沙瓦

男

嵐尾草のうそも御各  
みそまきやか浪おん  
嵐尾巾や身よか  
夕日さると藤袴を  
西のあしりや  
かましとやみ  
あつたふの契  
黄昏とぬも  
秋の野と一人の名

鬼貫 其角 曉臺 栢兮 一武 其角 寸木 麥志 半睡



朝

顔

あさうほの酒盛あふぬはうりか船  
朝顔よ志あましく人や葵帽子  
葬やよふたの薄の枯葉やや  
知鳥の白きと露ももえぬなを  
あさうほの赤一輪舟なりふちり  
あさうほや宵は改まりの焼わらり  
朝うほや櫛舟娘の這あまうて  
葵と笑あまうてと志あまうて  
あさうほやまきのあふらふと  
朝顔の庭よのよけい憐れ声  
あさうほや壁の目教の今と  
葵と人あうせおる蔓くを

芭蕉 其角 去来 荷兮 舟泉 昌房 杉風 北枝 牧童 其糟 蚊足 山川

芙蓉

秋海棠

秋木瓜

あさうほやあまうてこの水も残は月  
朝うほや虫あふらうほの運  
葵の種とあまうての葵の系  
枝ふきの日にくかて芙蓉うか  
百合のよ芙蓉を結るいのちふ  
あまうてあまうて小刀もあまうて芙蓉  
あまうてあまうて紅の竹もあまうて秋海棠  
秋海棠あまうてあまうてあまうて  
秋好の妹をうりあまうて秋木瓜  
あまうてあまうてあまうてあまうて

胡及 末山 一笑 芭蕉 風麦 佑徳 支考 素浅 韋吹 踏通



# 萩

萩亦や一夜ハやうせ山の犬  
 荻言ともみえとを萩の使ひの  
 朝露れちぬと萩の使ひの  
 萩さうの麻のいそりお麻ふけん  
 萩りや萩の子あふいそり水  
 比岡の藤やかりあそ船の端  
 とたえはけりお地野のあふり  
 工うは麻ともおえー萩れ露  
 萩よ来とくまおちりそ雀う  
 村雨や萩の根よあけ蜂の声

色蕉 其角 土芳 未山 牧童 猿雅 忍市 車庸 雨邑 冷袖

# 萩

蕎  
 麦  
 花

萩の穂やひをけうらひ  
 友とよれ萩もえ車の萩のこ  
 雨此日や萩をぬふそは庭の萩  
 あうらきの法焼まー萩乃ら  
 萩萩や春の季うら梅さうら  
 蕎麦ふらうら萩てりてなを山踏うら  
 やうそんよ棒くうせんそはの萩  
 萩火のあうらてるや蕎麦花とな  
 暮すもて盛らせりそはのと萩  
 うら蕎麦やうら萩の木うら根

色蕉 鬼貫 卧菖 岩翁 貞室 芭蕉 宗因 荒雀 雨汁 閑如



稻の巻

あつさどもあのみきはけり 稲の花  
七度の花のはしあやみ 稲のこ那  
品川をともなれてささし 稲のこ那  
吹ふのぬ風の目まきや 稲のこ那  
蜻蛉のま居ふ数りねいね 稲のこ那  
そのこ本も紅葉しにきり 唐のこ那  
番椒 茄子小あけもろと 稲のこ那  
まろのまの 蝶ののやまのや 稲のこ那  
土虫の羽いといけや たるのや 稲のこ那  
いとろはくえてるるのや 番椒

遊力 智月 峽水 已百 遥里 宗因 未山 未岳 探志 野坡

番椒

系瓜

併あもあまを 割る系瓜の  
まきしやや 系瓜の系瓜 捨る  
針左の指く 這入るらうと 有  
癖さうとや 起とととも 音好く  
うくもく 音好く 音好く 音好く  
さうもく 音好く 音好く 音好く  
さうもく 音好く 音好く 音好く  
夕顔の花よらふと ぬふくく 系  
竹の声許由うひまのさうと 音好く  
蔓又小ちや 倦ととく 落る 瓢の  
頃れの目鼻めきゆくふくく 那

鬼貫 南市 許六 季邑 電世 土芳 風草 和及 其角 希因 蕪村



芭蕉

蓮の實れ花の心もさきもさきも  
くさくさ實や風もものごとくさるる

嵐雪  
百里

蘭

らふの香や露の朝ふらきころの  
盗ころの蘭や乞食の裏の下  
秀くさね泪のうらみやあまや蘭  
よるの蘭あふかくまてや玉拍

芭蕉  
嵐を  
宗因  
蕪村

とせ  
系

秋風小巻家所らるる芭蕉うら  
まらふれや芭蕉のけりの小僧哉  
家と同一なるる蕉のうらまらぬ  
香雨ふらまて芭蕉の葉うら

凡兆  
遠里  
園之  
汶村

花  
野

世の中をかりてり人花野うら  
あくかたね風の花野のさくらんぬ  
殊風のまらるる行を野の南  
馬道ももろて行を花野のうら  
山伏の火をきりこゝろを花野のうら  
のきあふく牛のよとほく花野のうら

胡故  
坂燕  
卜志  
探泉  
野坡  
野徑

桔梗

野あまのや花をり衣きき中り  
秋行くくまの心桔梗の蒼の葉  
村雨やこころくまの心桔梗  
桔梗もくまの心花をり桔梗堂

徳元  
左次  
幾紫  
荑村



薄

紫苑

角文字やいせの野飼のとぬ芒  
燃きぬく盛燭をかくは芒う系  
庭きりてもおちくくかき萩薄  
花さくた戸外をさすれ一夜を  
抱おくと西のきき泣きうとくれ  
穂きりてと目とさきひうる春う有  
おりの移き言ふふええの薄う有  
まき移きたひ人みなうとさき芒の那  
野兼ふと折きくえおろを紫苑う系  
なつうしき紫苑の下北野兼う系

其角 荷兮 路通 牧童 荅籟 芦本 野坡 鬼貫 素山 笑林 蕪村

野菜

鬼灯

重箱ふぶなたとき野きくう系  
さくまくにさきく笑まうふ小野系う系  
り道の野きくの果を漬可程  
子刈は道くくとを世まきくう那  
松う根ふふ代をあやうほ世系我  
根を石おこれの川系野きくう系  
角石を拾ひのこせー野菜う系  
鬼灯やもとい薫かくと娘の子  
ほくはきりの傾城のふく網子う系  
うるあまう鬼灯吹くや猿の負  
鬼かや清系の方う系う系

其角 旬空 柳宴 露川 永参 亀翁 尺牘 杏水 進寄 泊荷 蕪村



鶏頭

蓼花

鶏頭のひらきをうめや塗まら  
岡寄をみよもさねを系 鶏頭  
花をくり日と結りけり 鶏頭  
雞頭や紅錦繡の車長まら唐  
又これ正物を殿うきん 鶏頭  
鶏頭や唐のかしらに夕日  
鶏頭を思ふうきんやうめ  
花もろく 佐野のあさりの蓼花  
盡小まきをさしひかり蓼花  
捨鞍やほろりもさしひかり  
三経の十歩一にさしひかり

丈草 史邦 野坡 林風 安信 亀世 文鳥 其角 琴風 堤亭 其村

稻

蘆穂

稲雀茶の木をうけや途とと  
い稲う川く世に坐しうめ  
又は夜や稲く家のこもひ声  
稲塚小高次ちうき川系  
さまうりく 稲とりの身もか  
稲村の落をそくをる 荻うき  
り穂といふ名もまかりく

一本の芦れ穂中せしぬせき  
川舟の跡よ起しは穂芦か那  
あしの穂ふ著う川方や客の  
芦の穂や解を中とひて折もせん

芭蕉 凡兆 力平 横儿 ち孫 孤屋 史邦 防川 全孝 去未 其角



# 尾

ゆき 蝶や尾花う袖の紋とら後  
白玉の尾花をむくかうりぬれきうの  
さく波や穂よ出ぬ先の尾花川  
山伏ふ鼻うまうれうは尾花ぬれ

重頼  
楓子  
負室  
東朝

# 菊

起あうは菊あゆのなうり水のあと  
菊をまきる跡まうくかゆあうりなり  
雀の声菊七又のなうりぬれきうの  
さく波や穂よ出ぬ先の尾花川  
山伏ふ鼻うまうれうは尾花ぬれ

芭蕉  
其角  
嵐雪  
去来  
許六  
杉風  
李由

え未やけしと岩根のさくくのいぬ  
浄定の外うやまきくはまきりぬ  
行馬はあうかきぬ菊の  
酒うまふよとる波うや菊は  
菊畑先へさくいとあるの  
さく波や穂よ出ぬ先の尾花川  
百菊も笑うや茶のうらな南  
あうまきくのいぬはまきりぬ  
塗物あうらうかきぬ菊の  
菊の香うまうや菊の古上戸  
まきりぬ波うや菊の古上戸  
菊の香うまうや菊の古上戸

良室  
宗因  
鬼貫  
梅盛  
正秀  
幽宵  
嵐竹  
諷作  
木導  
北枝  
千那  
千川



未枯

うらむ枝やをれけき死志のふ山  
未枯之魁とくみめふをうり中  
うらむ枝や豆腐をうりふ門の桶

毎閑  
馬子  
青峨

烏爪

保戸々谷の夕日やうらむ烏爪  
市人の声あめあめかかそ爪

亀翁  
柵雪

葛

蔦かくとを真まのふひや牛の草  
葛の枝あや貝売あふ山北間  
石山はふも葛のうらむあひて  
葛うはくく月まう足くぬ梢ふ

野城  
岡高  
乙州  
里東

梅のとら

あましーとや温飽るまの梅のとら  
初よるあふうまうかくく梅まとき

之道  
乙州

ぬっこ

うらむぬのぬうらふ角やかこつあり  
朝うらやぬうらふの蔓の法とうれを  
うらむぬのぬうらふ角やかこつあり

専吟  
及角  
蕪村

芋

煮てる高野山よりうらむ芋  
芋の中実のうらむとそま日の月  
いもを煮て酒をまぐ風のうらむうれ  
秋煮てもあまらる物といもゆの蔓  
芋を抱く酒中身なうらむうの淵

宗因  
鬼貫  
其角  
西霏  
桐橋



男  
葉

間川葉や有とてわしは筆電のほの  
まひきまや後めとむりかまの子を

時臺  
西邑

刈  
萱

刈萱や露のりち顔の草はふり  
かるうやとあふしは跡もようり

牧童  
巴丈

木  
犀

木犀や一尺四寸かきわらむ  
りし世いの花は実なるね夜を

其角  
為有

木  
杜

実

賣為の一穂出まぬり北かや  
志もの朝梅柳の実れをれり  
さひりさや吉野をのやまありあり

西雀  
杜幽  
桃隣

推  
の

実

同来り推りる里の松葉より  
ゆきまうらうねや推乃九折  
村雨ふかひあうけや推の音

其角  
三翁  
名泉

覆  
杖

半紅葉覆の實とらう白ひ我  
うたはゆり油ふたりは覆木

其角  
路通

栗

生栗と振りはやくは山路  
越栗はふさきけりる法の場  
栗の名のあふきもの栗の上  
落栗は芽ゆきかたは嵐う那  
越栗の笑ふも淋し秋のやう

其角  
嵐雪  
惟我  
透雲  
李由



熟栞

木傳りて穴熟ゆれ熟栞の南  
小上戸熟栞の林かくはさきり  
象の啼くきるよ流る熟栞は

本草  
一蜂  
百花

紅葉

山ぬきくころと表やる川紅葉  
白くみりみちの外はならの町  
あふねくとりのいひてくるおき  
肌をくし件切山のらととみち  
りみちるや火おらうと赤火繩  
山川はのほりかきく紅葉の南  
かあつて栞よりみちとあうせとり  
りりるるるる夕日春巻る川

其角  
鬼貫  
東順  
凡北  
野坡  
如柳  
秋之坊  
野童

茸

松の葉おその火まらうとワ流る油  
くら木とるまおけしあきれを榎茸  
柞葉とく松茸とるね白ひのま  
松茸や田舎裏の中お栞くは  
る川茸の裏より朽け日流るお  
まら茸や番とお流して魚うと  
紅葉お明野の比丘尼なんうや  
は川茸や文きる声はるり

其角  
嵐雪  
真児  
園友  
佑蓮  
為有  
木導  
吾仲

茸狩

茸かりお日のまら高し岡の杏  
たけうりや黄茸も見の嶽し良  
茸うりや人おとるおとる

水奥  
利合  
去来



虫

蟋蟀

野に多きや風も吹くる虫の声  
 今宮の虫とて鳴るの音は  
 暮はちと芭蕉の虫の声  
 黍稗の売もくさるやひのこゑ  
 ひの音や園宿丹の藤菜の中  
 燈明よびもよるや比叡の虫  
 虫の音や木綿雨のわとくま  
 玉根まゝは暮風北中や虫の声  
 せれは草のまゝや秋のひ  
 蟀の音や株ちと茶桑の目れよる  
 ちの秋は白のあちねやのと原

鬼貫 素山 許六 壺中 養浩 藤葉 汲村 李由 文鳥 汶村 樂峰

蟋蟀

秋

種

秋

秋草ふゆのゆりも黒き蟋蟀  
 いろくまもて秋の小てら我  
 あきの蟋蟀一もあそびや夏の甲  
 秋の蚊や血もあつれたる酔とら  
 秋は蚊や友の蟻のを泣けり  
 蟋蟀をせと捨ぬるり浦のあは  
 あきの蟋蟀よふあせぬ日向の  
 秋の蟋蟀うらややく足せし  
 秋の螢二夜もくさる窓ふく  
 月は夜もくさるやふく秋の螢

万子 牧童 肅山 尺言 泥足 史邦 秋之坊 藪打 櫻長



松虫

松のふきう縁をさねの友もおし  
きうむしと跡さねるふる新うま  
虫ととゆるあとのり鳴よけり  
や川虫の宿夜ハ松の白ひうお

其角 車未 一髪 沙明

鈴虫

鈴びしのゆりまきく啼雨夜うま  
とく虫や松明先へあそむせとく  
鈴ひしと客をか人さや廻り様

季吟 其角 凹觚

蟬

猫と食道しと蟬の妻ハととくらえ  
蟬やかからりこまうとく小半月  
我宿のとちろまきとせとく鄰り有

其角 荷菊 百里

蓑

虫

蓑虫の家崩しと野方うま  
みのむしと蟬で枯木の風情うま  
蓑虫と千種の花はかくしと那  
らのむしと蓑の帯や草のほろ  
みの虫や跡ひくるととつふまうり

句空 淵泉 史邦 村

蜻

蛉

山の端をみんまのくまや破れま  
蜻蛉や追うけてゆく泊をんな  
幻の秋のゆくやあうとんけ  
蜻蛉はまての體とてはまの中  
とんぼうの巻をかゆる夕日うお  
蜻蛉のまうとねけくは廊下我  
日と斜園虫の蜻にちんぼうま

其角 支考 大草 沽荷 斜嶺 村



# 蟋 碎

床おきくひひきふりや 甚  
 さむ月や 蟋をまじるまじりく  
 灰け 捕の 平かみけりまじりく  
 中し 寄れハ 声を かくて 蟋碎  
 秋の夜や 夏と 断とまじりく  
 こころ ちや 先へ 身く ぬる 蟋碎  
 引まけ 羊に 首ありまじりく  
 水の 声や 露よ じせく ちまじりく  
 賣 字 秋の あいさ 州とまじりく 茶  
 なく 聲や ひくく あら ぬの 蟋碎  
 きり 穴も ちまじりく  
 常 燈 下 螢あ ちまじりく

芭蕉 其角 凡北 智月 水鷗 多川 乙加 從吉 范字 幸坊 丈州 嵐雪

# 竈 馬 塙

乃を 老ね けひ ちまじりく 蟋碎  
 古城や 夜くら ちまじりく  
 とひ ちまじりく  
 居 風 長も ちまじりく 蝨  
 啼や 竈馬 ちまじりく 端の 玉  
 情 出さ 月の名 残を 啼く 蟋  
 磯 際の 浪も 啼く 蟋  
 食の こと 柚味 啼の 釜 蟋  
 かまきり の 鎌 ちまじりく 露の 玉  
 塙 郷や 寄 引の こと 萩 蟋  
 うまきり 北 鷗 ちまじりく 茶

素山 鬼貫 舍羅 希因 越人 正秀 惟然 程已 錢芷 北枝 凡峯



冬虫

蛸

秋もくやうくくとあふをゆめ冬虫  
川株み足引くぬほいふとく系  
二系なうほ青田ふせしな長う那  
驟豆大引よよもむいふとかな  
綿の青舟巻返らう冬虫の舞  
竹の戸の蚊帳よよひはくいとく船  
日くじや捨てなるともくく日と  
蛸の声そらみとの親のはと  
むくらくやまこ人ねぬる瓜もく  
ひくくくや松系ふ倦多ふめ衣

風 園 溪 石 雨 柏 為 有 昌 度 伸 風 を て 涼 冨 甚 梅

渡鳥

小鳥

鶉

浦浜や通しり交休くくりき  
山端や渡りはまきくる鳥のなま  
日々西小西のこまきやうりき  
吹息もまふは耐ふやうり鳥  
聲のうき小鳥の中はは渡り  
秋の野やまかへは小鳥の小鳥  
板葺や秋の小鳥の歩行音  
小鳥まふは音蟻くまよ板きし  
榎の実数る鶉の羽音や朝嵐  
夕くまきとりてなると鶉の羽音う那

去 来 野 坡 遊 力 近 之 鹿 谷 落 栢 蕪 村 芭 蕉 保



# 雁

酒買ふゆふの雨夜の雁こしら  
 厂のゆふゆふはく浦北名を我  
 ち川厂や歌りちあくる茶湯客  
 起くるて夜明人なり人のよ急  
 厂の移もあ川うまのめくひまや  
 初雁や比良く追舟帆うけ船  
 行厂の友は法をさうや奥の樹  
 ノの行くつはかき終や傲田の橋  
 鳥帽子着て白きりの皆小田の雁  
 かたう終の卒ふかうは時程淋  
 ちる雁も行灯とあまはくふり

其角 馬見 風幽 万平 越人 木部 惟然 北枝 嵐雪 夫来 落格

# 鶴 鳩

# 鴟

# 四十 雀

甘きまの足のりとかは落し捲の霜  
 のまはまの鶴鶴の尾の契りうね  
 せまこれのや蟹上と終る畔のうへ  
 庚りやもう且まて小鴟の草鞋うま  
 目を種一舌舌も書一休降の声  
 鳩啼や木舌屋うられまひぬと  
 此森もさかくこまのりりとおと  
 老の名北ありともまうく四十雀  
 世の中や海りくくをて四十から  
 かーらひぬまてまうまのり四十雀

芭蕉 史邦 磨盤 嵐雪 歳人 露川 蕪村 芭蕉 鹿谷 可吟



鶉

燕

桐の木ふらげく啼くは塚の内  
 伏見ぬハ町茶のうらみ啼く鶉  
 日あつりせせりうりなると鶉う素  
 馬まよみまふれてなうらげら  
 ら川鶉時計の六ッもううせまり  
 幼く啼く夜を待ぬうまを鶉う那  
 旅人の小判を借りうはらうな  
 粟叶穂をえぬうは待や啼く鶉  
 中へ過も流れて啼くうはらうう那  
 燕もむ寺の太鼓かくりうう  
 せ糸屑もと不さと啼くうはらう那

芭蕉  
 去来  
 正秀  
 卧高  
 史邦  
 山石  
 因友  
 支考  
 露川  
 其角  
 凉帝

鳴

鶉

鶉

川ぬとや早縮ううの町の声  
 石打てまるとは鳴おあをれう  
 あとふう川姥鳴とらふるうら  
 鶉突の行程長き日あうう素  
 泥垂の町中遠きは夕ぬり那  
 町細と風のあうえれゆあをう那  
 鶉の行方うれを山女あ素  
 ひよとりやうあの日おをけう声  
 居りよまう河系鶉あう小葉田  
 高土手に鶉の啼日や雲ちまれ

芭蕉  
 言水  
 龜洞  
 児竹  
 其角  
 湖舟  
 大山  
 李圃  
 荻子  
 支考  
 珠碩



鳩吹

鹿笛

鹿

淋しうらな 鳩吹まきくまふとりのうね  
 鳩吹や 横撥糸の若かまをそひ  
 ともふくや 太山ハハくまきこま下り  
 鹿ふんや 中を狸のたらつみ  
 うーたうて 鹿よ 笛あくさへんか  
 小男 鹿や めそまきまより 此流と  
 啼 鹿を推の木のワふえん付く  
 北 差 峩や 町をうら越 鹿のとる  
 朝 鹿の 身 ぬくひ 高ー堂れ 椽  
 鹿の 目れ 朝日にひうふ 高根う有

野水 珍碩 甫山 徒元 大山 其角 去来 犬草 許六 李由

冬

あそれさや 日の 照る 山よ 鹿のとる  
 番の 火をともすより 小 鹿や 鹿の形  
 移くくまて 道なき 鹿の 身 向くれ  
 さひくまや 尻うらまゝる 鹿の なる  
 鹿 啼くや とんと 波うの 声 ぬ 跡  
 元 山の 松を こんせ 去り 鹿の なる  
 尻を けり かくや 夜明の 鹿の 声  
 かんせ けり 四足 そろひ 小 鹿の 形  
 かま けり ひとと ちまき 鹿の 声  
 膝 こんせ けり ちま 鹿より みる ち  
 けり けり 鹿を けり けり 山 ち けり  
 三 弦の まき 鹿や 鳩の けり けり

万手 探志 不障 木導 野坡 知足 風晚 波村 蘇葉 半浅 句空 季吟



# 行 焠

# 冬 近

行秋の多きをみりや青密棋  
 けのあきの細く人をさうせしり  
 ゆく秋よまらるるあともなれ給うを  
 ゆくあきふ教める家のあはしう  
 行あはや晦日のふら結星の窓の  
 外秋の四五日ようは薄霧の角  
 行あまやを敷ておくる風の神  
 木をさくくまを梢うら行あはそ  
 冬もをや長道のをより九十日  
 冬近し附西に雲もあつようそ  
 めのいそ・雲の志らねんみ冬近し

芭蕉 越人 牡年 浪老 その 丈草 東以 乙由 来山 蕉村 撰良

# 初 雪

## 古人續五百題並發句集

### 冬の部

初雪やうけかこくは橋の上  
 冬雪や内ふみさうる人と誰  
 初ゆきうや裾へくくぬ白丁花  
 花とよむ雪ふはなみはるらゆ  
 冬ゆきまぎり引てある朝戸の  
 初雪や波よ伊吹の風不門ま  
 冬雪ふは雪のそよ朝朗

芭蕉 其角 嵐雪 来山 野水 千那 史邦



行  
吟  
雪

初雪やまの草履もよく隣まで  
ちのゆきや松あつて茶の雪  
はの雪や一面に降る濃田の橋  
あつて人の琵琶のなる日とちの雪と  
初雪と麻の角あもあつた  
ちのゆきや人よの先よりのゆき  
初雪も花をふとふゆきこの自  
ちのゆきや人結市の松かき  
そのはの初雪買ふる雪甲より  
はの雪や森言ふらひー夢合  
ちのゆきや小阪よちのゆき道  
初ゆきやちのゆき伊用の在ふき

照通 北枝 李由 山子 紅雪 三ヶ 斜嶺 之道 氷花 知星 配力 朱袖

雪

ちの雪や人のありくこの日のゆきと  
初ゆきやと初雪あつて木賊山  
雪ころも深みくむは居る  
ゆきの日や船取との教れり  
このゆきふゆきおととくも人  
後の中ふ居る雪の山路  
ありうへて山くもる雪の窓  
横壁よ織せよゆきの門  
暖や初藍のゆき見まひ  
十四やと海手ふきし雪は門  
雪の初雪根のゆき

楚常 石周 芭蕉 其角 嵐雪 玄未 支草 支考 荷兮 許六 宗因



酒買女あり子を奪うせ雪乃若  
ゆき降や若虎の門と辨ふけり  
うさあや雪のあは山さく山  
車道なるたれ冬つありしり有  
くさき夜小物ハロくりもせれ隈  
雪の江の大船よりの小舟り那  
け鳥麻とさるるさるのく月  
黄昏もさるはゆきめあまらるる  
ゆふの日やとれくむの都香  
夜の雪落さぬ中うみ枝さく  
川越とく身ゆきひ凄し雪の森  
竹まの雪独首にさるてさるる

来山 文九 小春 二水 芳川 編子 卯七

大雪や名金のうちのかくも  
ゆきをまら宿なれら七のり  
ゆりあつてあつてもせし雪餅  
朝の手は隣あつりはる川つや  
雪ふりふ程あつきうる不二の山  
日枝ひとつ前よと雪ええれ  
六条の豆腐は沙汰も秋の雪  
ゆきの日や先うさく子とり  
毎一葉ちりと形りたり雪の上  
さくさくれし雪はえぬありこと  
峯くくや鳩とりのまらと雪さる

一髪 惟然 一井 野坡 智月 乙羽 吾仲 程巳 土芳 野水 史邦



雪吹

長檜や徳田一相えん雪吹松  
村雲此處吹出夕や雪吹の根  
雁鴨を波ふらちひむききう系  
下雪吹かりととくしり馬の落  
折ととも雨すり至極の雪吹う船  
あらしんも同一雪吹の雀の那

其角  
丈草  
素覽  
頭水  
秋之坊  
朝叟

雲

雲あも牙ハかまえとり 沈の響  
こそれ降の音や朝餽のてまする生  
りう仕赤く朝水くみのひと雲  
それ為きの鈴ふりおほみそれうさ  
初こそそは雲の園とふ小懸うさ  
みそれ降宿は志すりや簑の夜着

其前  
魚好  
千川  
正秀  
蟬鹿  
丈草

初時

雨

旅人と我名呼まらん河一うさ  
河系もの鳥帽子の上や初時雨  
新葉は云根の雲やうさ志んけ  
初志これ野分お骨の雨りゆの  
居はくひのるもととるや初時雨  
とら志これ吉打海膳の射もこそ  
雷落し松と括非ははら志んけ  
芋食の腹るくじまり初しこれ  
暮とゆく一羽鳥やうさ川一うさ  
米川岩てまきや秋田の初時雨  
うさあおの山をさるもと初志んけ  
初しうされ眉小鳥帽子の雲うれ

芭蕉  
去来  
許六  
西吟  
浪化  
言水  
丈草  
荊口  
諷竹  
嵐外  
希因  
荃村



雨 耐

草まらうら大もあつて 牧歌の声  
客人やまらうらとこころと 耐と耐  
宿者よ夜更の借や 志らるる  
釣杖は夕日そから 北へを  
幾人う志られかけぬ 瀬田の松  
松風の里を 扱とる 志らるる 那  
宵明と分れら 夜く 志らるる  
食耐よきし 合ふ村は 耐西うま  
志られはく 雲小これ 入日つ  
涙し守とりの 兼忘る 耐西う那  
曼事 志らるる 志らるる 耐西う  
島志鳥も山える 志らるる 志らるる

芭蕉 宗因 末山 其角 犬草 嵐雪 許六 去未 秋風 傘下 楓竹 園友

探

松山や志られの足は 志らるる  
葯蕪の湯氣あつて 耐西う那  
牛馬の臭うも 志らるる  
志られはく 松風の 志らるる  
鯛焼くまも 伏見は 志らるる  
耐西う那 下ありの 志らるる  
喧嘩より 耐西う那 志らるる  
食堂ふと 志らるる 耐西う那  
板屋や馬の 志らるる 小夜志らるる  
小夜しられ 隣の白を 志らるる  
家くまも 志らるる 志らるる  
かゝ舟の 黒津 志らるる 耐西う那

利合 猿 浪化 北枝 卧高 煥玉 車庸 支考 史邦 野坡 吞水 探志



霰

松苗吹りらうて歸る志らまの余  
湖や志らまの下の星のかき  
けさうひ小結りなき市の射西哉  
雑水も琵琶まきく軒はぬれさ  
海へ陣はあぐれや雲よ浪は音  
老武者と指やさるんくぬぬれ  
飛うは山石のぬれや窓のらち  
まら浪とつれてこそは霰うそ  
冬瓜のかくてもぬれぬれぬれ  
福こそるの山田ふらうぬれぬれ  
曇るぬれぬれぬれぬれぬれ

三岐  
北玄  
正秀  
芭蕉  
其角  
去來  
上草  
重治  
句空  
正秀  
望翠

氷柱

丸合羽はけしきまきくは霰の自  
森深く野馬飛とむあぐれぬ  
むらぬ帆ふ霰なまきくは月夜うな  
あぐれ障目や奥店の鱈のらち  
下まきり庇とくぬれぬれぬれ  
ぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ  
盃や傘をさすとぬれぬれぬれ  
ぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ  
ぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ  
ぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ  
ぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ  
ぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ

知足  
伸風  
暮手  
国高  
松翁  
丘兆  
宗因  
鬼貫  
一夜  
兩鹿



# 霜

霜をこそ荒らぬまきののよれは菴  
 平相朝はあふしやつるむ生姜も  
 一の葉やむとりのくのを相の霜  
 初霜あゆとあふの舟中  
 はつらもに行や北斗の星の前  
 山鳥の尾よえかくとや夜はしも  
 親と子はあ夜をくらふ野まうま  
 後の跡あむ足はく今朝の霜  
 際とく流の水をぬれらる旅り  
 からまきや麻さあはふと無の  
 はつらもは流ふよこわら草はら  
 里人のつらりの鉄橋のしも

芭蕉 嵐雪 支考 其角 百歳 曲翠 溪石 野坡 彫棠 路通 丈草 宗因

# 氷

若焼や裾掃の田井はら河氷  
 舟あてきまやく氷る麻老う那  
 滝幅や氷は中乃いさり  
 我孝と流きまら月き氷り  
 紅麻子結や中下まみ  
 池の奥あはしあてぬ氷の南  
 ゆい道は音おり流きこり我  
 五蓋ひとら氷のうへのあられ  
 枯芦氷氷代のを夜しやっ素  
 刈株の豆あさくあれたりか  
 はきとりの松あめきとりの水  
 為氷や星のたのほくまきり水

芭蕉 秋風 其角 亀世 氷下 知足 孤白 青人 苔翠 芦角 除風 素衣



凍

軒凍てどくくや銀治う棍の句と  
しはけの凍つきなつる毎の風

思秋  
秋之坊

冬

荷もなうて柳やかろきふは雨  
下京や雪積う人の夜はあえ

亀世  
九兆

氷室

汗出して谷中突進む氷室うな  
海荒腸は棄埋めつき氷室哉

冬松  
利重

馬車

峠より雪車ひきおろすと塩木うね  
馬車よりのその月出ると且の南  
法座馬車や先よまくるる及具持

龍彈  
一井  
不玉

神

無月

神を月好くく雀のまの多き  
旗梅匂あけてるゆらん神を月  
夕陽や流るる小六月  
つう家の佛とるとかみする月  
神を月火とると称宜の由た哉  
十月やの月くく雲は雲みゆく  
咽暮姑大根らまー神を月  
菅穂る田面はどとり神を月  
元山や化をめつるとかみする月  
神を月豆腐の煮るめじり  
ひと志まの園もあうるー神を月  
宗任ふる仙とせよかみする法哉

其角  
春山  
鬼貫  
任日  
言水  
幽也  
泊徳  
氷花  
素覧  
秋風  
朱細  
芒村



小妻

系之

風もあらし息はく小春の那  
大木小ふる時日と小妻か首  
瘦寂ふ茜根下くは小ぢるる  
小海老よる字子や小妻はあのみ  
糸の木ふむの糸長の小妻の糸  
團栗と小妻よ落る瑞山この那  
小ぢる風をの帆も七合五又う糸  
海の音一日遠き小はるの糸  
霜月や日まふせふあけくを糸  
人教や糸月と落のぬしは山

野水 嘯風 夜吹 潘川 光彦 言水 蕪村 曉臺 去来 甚由

師走

傍はとり師走の野を梅の  
うらみとの落をよ麻くは師走の  
ひの賣は声きくくは糸あはさう  
糸はくもなくと痛くは師走の  
煤のまよま分をくくは糸あはさう  
煎茶に飯はふ入し師走か那  
せん湯のゆきけ清きあはさう糸  
碓の糸の月踏む師走の那  
はあままよるも旅とるあはさう  
師走ともまよるく袂は長さうな  
門初をまよる師走のあはさう

来山 支考 荷兮 乙加 岱水 胡布 唯然 汶村 卧高 挑隣 里東



冬至

公おのちの朔日冬至の那  
門前の小家も掃ふる玉か奈  
書紀典主故園よ遊み玉成  
荒るのいと暮るふとに神送り  
布子もてさひしれ影や神おとて  
雑水の冬くしてふきし神おくり  
吹上居空よ木の冬あや神送り  
家くの田主居よるなり大母しろ  
装束は簾も倒さぬ神乃田主  
神の田主とておのり神のるま  
駒犬や勝もあつと神の田主

貞室 櫻村 鬼貫 去来 紅朝 高川 其角 投風 鬼貫 荷翠

神送

神の  
あや

十夜

送  
忌

十夜鉦明日は納豆もくく死けり  
はめて十夜はつ将と九十九夜  
丸あつと月夜うきき十夜う船  
十月は十の代もと十夜の有  
あ鳥をとたつとく深む十夜う  
祖父もくの京もまきき十夜は  
あなたと茶もたあくと十夜哉  
達磨忌や壁子向くよるあふ別  
しつたま忌やりのさう食のう文字  
送大忌ふまきくしあは難う船  
あつとあや茶釜の焼も新法所

言水 蝶羽 壽仙 波村 希因 乙由 蕪村 末山 史邦 梅葉 希因



御 命 講

御 取 裁

桑鷄頭切はくくろり御命講  
法令講や願の青死時比丘尼  
おめの講や帝衣の上は麻とうき  
秘つろりや密をひせしと日蓮忘  
法令講は殊敷ふまろり抄子火  
おめのかう上戸も解法一座の南  
あ鼻正誠こそせまろり法名志一  
おろり裁まろり存る松北坊  
附西ある空や八百やのおえ裁  
玉のふは百人前をおろりとし

芭蕉 許六 奚魚 何之 木尊 汶江 千那 史邦 汶村 養浩

蛭 子 講

曆 賣

御 火 燒

行かろり空伊中なりろり怪不講  
夷講我料はしとろりねね  
大酒や三日はとろりおひと講  
蛭子講おひも鴨ふ飯しろり  
あさまろりやまろり月の曆ろり  
抱くやえれしとろりさ曆らろり  
こよみ賣月日手將し下ろり  
法火燒の盛物とろりあし鳥  
御火燒や御治る傳へ古名をし  
法火燒や霜らろり死京の町

去末 曲翠 昨丁 利合 來山 孤屋 凉帝 智月 桃隣 芝村



あひこ  
系

神樂

果  
神樂

吹草まりの月代まりきあるーうね  
 客人、は吹草あふの、小聲をけ  
 は焼やぬいとまりりの酒あか  
 おりもろもろてあふー山神あふ  
 あふうねや神樂拍子あふかふ、声  
 さう、あふ五らの機嫌あふいせ神樂  
 たり、あふき神樂乙女の化粧あふ  
 乙女子あふ神を廻は神樂あふ  
 ことらうねらと貴うね果神樂  
 つらう心氣や童あふはらう里あふ  
 結貫馬あふ夜あふ州あふり里神樂

定推 史邦 竹戸 北枝 岩通 宗因 望一 亀翁 之道 龜翁 和尹

鉄  
扣

長唄のころもららほう鉄あふ  
 ころころと鉄あふあふらー鉄あふ  
 物ころころ門あふもあふと鉄あふ  
 うら門あふ竹あふあふやあふ扣あふ  
 狼のひくうんとあふる色ー鉄あふ  
 朔日のあふあふれあふりはあふたあふ  
 世あふ中のあふ足あふりあふー鉄あふ  
 あふ声のあふあふあふあふあふ扣  
 鉄あふあふきあふあふあふあふあふ  
 あふあふあふあふあふあふあふあふ  
 食あふあふあふあふあふあふあふ  
 世の中あふあふあふあふあふあふ

芭蕉 其角 文卓 野童 柴帯 尚白 乙加 之道 水花 路卓 穀子



芭蕉 忌

佛名

大師 講

飄草の内も空也と清くく身  
 さらくき古らもまらに空也より  
 流る佛とらとれと良や針たくな  
 芭蕉余りよ嵩ま切打ん信流  
 くらせ成馬やまらあ、変と米買ふ  
 聲高し佛よりぬなり霜の星  
 仏名や鐘頭の香けうと煙り  
 大師講くく門前を執休ひ  
 うーなうて清徳を焚や大師講

負徳 鬼貫 蟻道 史邦 樽良 末山 酒堂 楊花 可自

空念 仏

木 葉

酒飯の飲酒のいづれも寒く念佛  
 傾城もいづれも海くねぬま念仏  
 多く念佛をせぬ出入の大工なり  
 空を掃う門前の庵も水はららん  
 かんとも念仏をすし傳る法りなし  
 人形や木の葉かき来る風の道  
 葉より足さつりよき木葉ふく有  
 ちらけくね木の葉にめくる常哉  
 俾の売つてきて葉ゆく木葉う那  
 あられあもつるみて落る木葉ふく  
 炭屑ふりやいづれも木葉かな

其角 奚魚 大町 康示 水山 素堂 松風 為有 四睡 其角



落葉

庭におちる葉その好らひきこみ  
賽銭を落して拂ふ葉もふりな  
船付のちまふくもはる葉もふり  
泥付うねおちるなるり袖のうへ  
哀なる葉もあふくや高きより  
白きは落葉ももさふき葉もふり  
一葉はく柿の葉もさふくもふり  
鴨の啼くも栗のおちるふり那  
這出くもちまふねするはう船  
此夕迎ふもち葉もあふくはふり  
生確もあふり門のおちるもふり  
寒山と拾得とあるおちるり那

宗因 去来 丈卓 佑徳 木尊 一行 如行 跡空 何空 如元 許六

冬十三

風

風小岩吹きとくは秋風あり  
こくくくくや風けりまは松の鳴  
木からくくや川田の畔の波も  
木窟や脊中吹く牛のこを  
あうくくくく道いそぎや頰つ  
風よらめく牛おそき入湯のふ  
こかきしやまももえを散らせ  
木枯や夜中ふる茶の出る  
あうくくくく食堂の鳥もく  
才嵐の雲より落る木の葉の  
風の更ゆくくや隴もま  
あうくくくや晩鐘ひとく馬十疋

芭蕉 野坡 惟然 風竹 幽泉 荊口 智月 里東 草士 左次 其繼 楚常



冬木立

こくくくや沖ふりきり山のまわれ  
木枯や剣をぬきふとまみ山  
風のあふり木やこぬやなま  
あふりや秋のこ動く楳のを  
風ゆかしまくくぬ中うきこ糸  
木枯やらつこをまふに枇杷の海  
貝うりを風の吹くらん冬木を  
象の目さあーときうま木立  
冬木立らるるやゆのたまひ  
かゆくさるねやうけ冬木を  
芥うく香お驚くやあ木な

其角 去来 大草 西邑 業言 牧童 歌棠 車庸 其角 奥口 蕪村

枯柳

紅葉

帰家

川越く赤き足ゆく枯やなま  
柳まゆくちりる昔の蓋清うり  
うまこころな月ゆきる柳の南  
冬落る紅葉を散くを風の声  
付西ともあふく紅葉のちる日ぬ  
詩や歌やあふちりあ紅葉我  
こくくじよ白ひやはほけて帰る花  
箕虫のらつらうやかへりな都  
山茶花のりこよりのひくくはり花  
あふまゆく青きあもありの帰花

鬼貫 其角 七の 負室 櫻良 風状 芭蕉 昌碧 車庸 素秋



枇杷

何の木と同ふまてもなり一ぼり花  
物凄やめくおりし後やうりの花  
壺とり糸の胡よきかかり花  
鴨のとささふさむしうくささ  
海草のさくく白くくりも  
皆人の白ひまらや一枇杷のそ  
窓流く後うら音やひしはく  
賢女あふ枇杷花のまらあふ  
去るれしとあめてさくや枇杷の花  
琵琶くと松風や枇杷花も  
枇杷の花もささあま日暮り

来山 鬼貫 樗雲 穹風 秀和 鬼貫 舍羅 一畑 野坡 二川 基村

山茶

八手

梅花

冬様

山茶花小葉まらるるも花の  
さくんむや蝶のまらるるも  
山茶花やさくくありさく庭の雪  
雷の後れらさくや花八手  
くくくくお笑くくえせくはハツ手  
草木ふく後あるありあき至林  
日付牛のくくひそめたりあき梅  
うめくく交体中やきけりき  
さねえこそ葉入あき浪ふ白椿  
火とりて幾日ふらりねき様

治徳 李東 炭葉 百里 林蔭 警水 汶上 鬼貫 言水 一笑



冬梅

ゆつりりと寒くする在りや冬の梅  
一とく梅も二とく梅も十とて冬は梅  
雪霜の骨となりてや梅のそね  
鎌倉の傍こととらん冬のゆえ  
月影の吉酒を移るや家北梅  
生言れ手はまもをそよまの梅  
冬のゆえまきのつらね石の上  
あつらふあつらふりかこころを牡丹  
大和も教ある家やあゆほま  
ひらくこと空け風の冬をま  
海土は土の黒さよま色ほく

惟然 扶搖 支考 露沾 其角 希因 荃村 維舟 西武 鬼貫 杜旭

冬牡丹

冬仙

冬枯尾

水仙や門をりりて江の月夜  
小坊主の上下をりり冬仙  
冬仙の花北まさの日つけ  
まはけの日親をそよ水せん  
水仙北北をいくへのなみのおと  
煉世真の中よりあつらふ仙  
まのせんのはつれかや朝嵐  
おく霜の敵を味うこよ水仙  
ふあ後の後家引けり枯尾  
中くお根はよくあつらふ枯尾

支考 尚白 智月 素牛 尚白 露川 斜嶺 乙州 蕪村 曉臺



茶 花

寒 菊

茶の花や鮎任ふる流き  
 ちやのそふ山皮焼家そふ  
 茶のそふ花や老と二まよ  
 茶花をふる登眉知を詠  
 ちやのそふや雪のふれ  
 茶は花や徑をこけける  
 ちやの花の物の序よ  
 寒葉やあふりとかは  
 かんきくや際うら  
 ききくは笑く  
 ん茶や砂ふ四五るん

野坡 巴風 彫棠 柴棠 浪花 龜世 李晨 上芳 諷竹 卓袋 野坡

石 落

冬 枯

空明の次女ふりや石  
 水跡あふ流  
 下菊の藪奇藤ふり  
 井戸神の結まらけ  
 笑ふくもあふる石  
 冬くれの木れ回  
 あゆ枯やゆを  
 冬くれふ風の中  
 あゆく馬もあふ  
 冬くれやまふ  
 あゆくや野ふ

言水 養浩 種文 蕪村 去来 龜翁 洞雪 新去 文丸 芦錐



枯 芦

枯芦や新波入江のさくらんみ  
 かれぬや踏雪の響を捨て捨小舟  
 春もくふ川辺の芦は枯れふらふ  
 志のふさ人枯く舞つふ舎りうお  
 菊うらや冬くく薪の位とく後  
 葛のれて壁を登くは菴うふ  
 枯芝ふまこ残るる志のふら那  
 小坊主も旅人うらや枯くまき  
 捨人甲めくうさうふ冬をけゆく  
 身もあうと物荷ひり冬野の

鬼貫 蘭水 曉臺 芭蕉 杉風 琴風 巳百 配力 来山 其角

草 冬野

冬野

野 枯

若松の梳荷こをむる枯れく非  
 月日をもうくはらうりゆかま母は  
 大腰小かく一投出とくれ野々那  
 裡子や枯れふ常乃ままとうこ  
 考つうりとかをわかれ舟のあや石  
 かましはのゆ移し折込枯野うふ  
 我まふまこくまの形まきうまむ  
 松苗も枯れふ目く川嵐の那  
 夜も居くまうまはいつる枯れうれ  
 塚知とん枯のとりまを野中うら  
 川筋の遠くも曲れかれせうの  
 白根へと雲ふれ行枯れう南

治徳 智月 琴風 園月 玄梅 呂丸 不用 拓風 土芳 和賤 岩谷 秋之坊



大根

曳

干菜

葱

足高う楷ハのころて格此うまふ  
志重ふ道あふりまてかれ世うま

乙由  
世村

旧日に山三井寺の大根切き

詩六

今様もあつねの淋一丈根曳

風園

系物おほく人さるる夕や大根引

李由

鉢巻をとまてと帯流そ大根引

野坡

玄宿の世おろろさぬう干菜煮

其角

うもくろて菜と干枯と塩玉うれ

真兒

ひとりのや一字の題のこまき草

百花

葱のまき入枯卧古葉ふの葉

蕉村

麥

蔣

鷓

鷓

麦蔭や妹の湯をま川類うふり

鬼貫

ゆきこしなや野まもある日に雪月秋

玄笑

そんの霜や麦蔭土のうらむおひて

北枝

麦をまきく人あつてまきく赤うしら

秀泉

冬をこの麦まきたのこまを彦成

沾徑

親父三人起さるまきふみそさうい

乙州

鷓鷓焼火の小道は朝戸う系

沾徳

木くくくや窓のしぬはむこまきうい

葉芳

晚うこの声や夜はみそさうい

惟然

こまきうい窓のしぬはむこまきうい

如行

こまきうい窓のしぬはむこまきうい

祐甫

こまきうい窓のしぬはむこまきうい



# 千鳥

けし崎の園をこよよとや啼ふ鳥  
 昼の内鳴小移あり千鳥う那  
 公成や釜小ゆら梅浦ふとり  
 かろ尻の馬ふえてゆい衝うれ  
 野の炭を啼わそあふるふ鳥哉  
 うらも移ぬ浪治う火清し小折衝  
 冬の日にを九小をせやまぐふ鳥  
 家お糸江よ入とまきや啼ふとり  
 葬の火をこまうり小奇や漢ふ鳥  
 松をせこれけて走るや村ふとり  
 朝鮮をこまもあまうん友千鳥  
 船よ棹火も声まねれふ鳥うり

芭蕉 素堂 其角 傘下 桃先 泥足 洒堂 野坡 李由 素仲 村俊 龜洞

# 鶯

あめうてりとは山やふとりの  
 去き浪小浮浦かうらとり名  
 ちとくや風の吹するゆらふ鳥  
 汝と引牛のこまゆ村ちとり  
 際知し玉あまうりやゆふとり  
 室君とこまもあまうり小折衝  
 小夜ちとり庚申待は舟を散  
 をしのみきて物あつらなる小池哉  
 多とむねやあふ鶯のあかみ  
 鶯の女は世をあまうりなる姿  
 をしそりの北くやあまうりと清氷

貞徳 冬柏 迷亭 苔浅 浪洲 合志 大草 尚白 山川 蕉下 文里



# 鴨

海ふれて鴨の声はのうふ白し  
 霜腹吐露さるしや鴨の声  
 明くさや城をさるまうかもこのま  
 鈴くものこゑふり渡る月を  
 昔くれと喰物清し鴨の聲  
 濛と世をのそいでるさる小鴨  
 何け波ふす雪ちりしうもの声  
 鴨子拙をいそち長き来うた  
 大年や難波入江の鴨の声  
 かものまの流もあぬぬきふ  
 鈴かものや脊中に雪のむとつる

芭蕉 丈艸 許六 嵐雪 野坡 程巳 氷花 春茂 宗因 支幽

# 水鳥

# かたは

水鳥のわびくくくくくくく  
 多る水あゆむと幾と山田のな  
 三川よりよぬとゆををそくそ  
 水鳥のくくくくくくく  
 多る小餅を飼傍の乞食我  
 水鳥の朝日遊くくくく  
 多るも森入くくくく  
 水鳥や舟ふ茶を洗ふ女あり  
 かいたるりばねてすけふし片男浪  
 流る江や竹菟をのそくかいつる

鬼貫 湖風 几峯 揚水 石周 由之 路通 蕪村 龜翁 汶村



暖鳥

菰一重くもぬやと念のぬくぬき  
鶉赤や壳引くやぬくぬき  
暖くもぬくぬき  
ぬくぬきぬくぬきぬくぬき  
鶉赤の目ぬくぬきぬくぬき  
視かぬくぬきぬくぬき  
雪のぬくぬきぬくぬき  
木かぬくぬきぬくぬき  
鈴ふくぬくぬきぬくぬき  
くれぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

其角 許六 尚必 素紗 芭蕉 芥英 桂夕 李由 冬市 胡市

鷹

鷹持

鷹のて殿の威をえたる鷹持  
御鷹野ふとくんとわたり細代  
鷹持の跡よひきく体燕く有  
とくぬくぬきのぬくぬきぬくぬき  
鷹持それぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

電翁 李由 蕉笠 乙由 曉臺

夜真曳

木兔

木曳て豆鷹持ぬくぬき里夜真  
我多小月夜ぬくぬき我無うぬ  
夜真曳や大のぬくぬき堀のぬ  
木兔の眠るとぬくぬきをぬくぬき  
木兔の眠るとぬくぬきをぬくぬき

其角 工齋 芥村 子英 木残



冬  
の  
籠

綿帽子の糊をちりちりや冬の籠  
百年の後たき人やはるお籠

許六  
肅山

穴  
熊

丹波路や穴熊打も悪右衛門  
穴熊の森首うのせも手つかぬ  
ちち巻や穴熊打の九寸五分

嵐竹  
山店  
史邦

鯨  
突

おそろしき鯨は行きよぬ青の月  
逐はゆる所もなうてくーら突

猿  
進守

罨

ぬーはけや魚と火宅の二ツうね  
罨や夕日ふのそく魚のつけ  
ふー讀や若浦領の濱年貢

和及  
如空  
史邦

綱  
代  
守

あまのむね度まろくくあーる守  
世に格すかしてやう治の綱代も  
猿丸の山かけのつとあーる治り守  
綱代木のゆきゆきある水々自  
つら風やあからみてあーる抗  
川はふや声吹流をあーるあり  
夜の雨仕合いうあーる治り守  
ふを流れて疾の綱代も義徳し  
綱代守守治のむる昇とありまろり  
あーるまろくくある中ら撈火打  
綱代守大根ねまをとろめまろり

其角  
素終  
正義  
不角  
何之  
其延  
鞭石  
心水  
許六  
乙由  
其角







齋

乾  
鱈

藥

喰

齋のはら度一交箱の入色示  
は一立やた身おの体丹波齋

来山  
楓子

をくじの乾鱈買ふて安いの  
からさひとつりくゆやあつ高  
なち抑乾鱈うりをとくくえるり

鬼貫  
雪也  
馬莧

あついと一身をあうらねく茶あつ  
禪傍や悟つこえ人のくまうり食  
客入小見物させくくまをくく  
くまうり喰罪科もな一あう新  
ちのくくと五徳をえけり茶喰ひ

来山  
芦李  
禅桃  
史邦  
荖村

き  
じ  
倅

葱くくく洗ひ立く体をもくく那  
火のけ虫脊戸くくきく一電のあ  
正客の行儀くくくねまうはくく系  
及くくく多賀のまの居の寒き我  
膝ふくくはくくめと出はまはくく有  
夜くくはの脾胃のはくくまや寒く代り  
雪あふれおはくくろくまきとあさのま  
若命ま切お吸えくくめな死をくく我  
さくあき日をくくやアまむくく烟料切  
多帯木にまおの藤の鉄のまあさく  
けくあいのゆ水あひくく居る馬う那  
まてんちらに沖の雲くくく等くく我

芭蕉  
去来  
野坡  
尚白  
喰車  
千川  
夕菊  
利牛  
千那  
游力  
魯中  
捨石



小屏風ふ葉を引かへぬまきさくぬ  
植竹又川うせさふし道の端  
あうらうはは鏡の白のまきは一の有  
膏自のあうくくと思ふさうさうね  
まうけはふねふれとを味移の程さし  
まうけ夜を襪小靴ふましく旅添うま  
とと刷毛ふ葉縁の竹はまをばり  
晨明の雲ふまみはくまあはうぬ  
桐の葉ふまみくまをく内まを  
生壁ふよりはきかへた寒さうま  
まむれ毛をまもなうくしふまをま  
あうらうふまの日向の寒さうま

斜嶺  
土芳  
九郎  
卧高  
支考  
左次  
波村  
魯可  
野明  
李由  
柳玉  
鬼貫

頭 巾 足 袋

目くくるとまきさくぬ巾の侍世うま  
山里や頭巾とく人き人もぬし  
かられまや片耳うけて角はまん  
節季ふふやうてなう人き巾うぬ  
爪針坊羽けくおくはまん一の有  
行膏の足巾や耳を明けて居る  
あうらうもそのま通も足巾うぬ

具角  
観水  
専吟  
堂芝  
之道  
鬼貫  
朱細  
素堂  
末山  
毛統



冬籠

鶏の尻あしはくやあゆみありの  
捨香や木骨の塚の冬こそと  
冬こそりのひまりてふのまきぬへ  
下帯の竿にのけはくまこのり  
そこのあや度間のあまもふゆ菟  
あゆありの眼のまきしんありの窓  
汁濁の跡しんくやあゆここのり  
松風やゆもひとりのあゆ菟  
沖の影もあやや静かあゆここのり  
鳥の羽のひとことまきしんあゆ菟  
大儀して鶴まきしんあゆここのり  
人か吐く息をたふらん冬あゆりの

去草 許六 彫棠 木節 怒風 朱細 園友 荊江 沙明 配刀 李由 千那

冬

土漕子や焼火小なぐり冬このり  
先杖をけしあ小雁人あゆありの  
統ふあふし夜も天下の冬あゆ那  
絡ふてあゆとまきしんあゆここのり  
あゆてあゆてあゆの冬あゆもあゆここのり  
はまきこまきてあゆまきしんあゆここのり  
嵐退くあゆあゆの冬あゆあゆあゆ  
あゆ冬あゆのあゆあゆとあゆあゆ  
あゆあゆとあゆあゆのあゆあゆ  
あゆあゆあゆあゆのあゆあゆ  
あゆあゆあゆあゆのあゆあゆ  
あゆあゆあゆあゆのあゆあゆ

千那 惟然 子堂 燕村 尚白 次草 松風 嵐雪 八峯 木山



蒲園

蒲園とて海なるさくらや東山  
我ふと人のさくら旅のさくら  
古今ふひと夜のあけの奴とんう船  
あぬ枿の木の葉のほや糸糸子  
紙子とてようねと火爐の走り炭  
南天よさらる音と糸紙子う白  
さうかがくなくねとりのえや古紙子  
人の中我うと恥のかと子う糸  
寢入りのまきけの隣も紙子うね  
の住居や後夜の紙子の已形

嵐宮 佐圃 蕪村 宗因 犬草 本守 正秀 湖春 二暮 景帝

紙子

火燧

はしつとめめけりまる巨燧うね  
ま夜中や火燧際よと月のかけ  
下糸をゆるりてさう河行脚う糸  
はとあよと寝もあさうね巨燧う糸  
寢るや巨燧とんのまあねう糸  
嘶して火燧小森入は重の糸  
灯のうけお教とてひさるあさう糸  
森とらうるふひさう遠き巨燧う糸  
宿うとてまらうち自方まさう河う糸  
伊亭土のふりさわる巨燧う糸  
燈物おまよりゆかたとさうう糸  
おし合とてさう河う糸

鬼貫 去来 嵐宮 其角 岩翁 真兒 松翁 我翁 氷花 龜翁 之通



# 埋火

小室を流しよきくまの巨燧うま  
 見其室よ繁結うらのさく河う船  
 自由さや月と追ひし重さく河  
 りのちりひ火燧をあげてのうまうん  
 埋火やあふぬらめちふ息かせん  
 うはく火の南をまけやまきりくは  
 埋火ふ根崎とふいそむ夜明く有  
 うらそ火やあふれて烟を柱ひとら  
 うのみにや雪をうらふりて  
 埋火や終るる孝る儒のそ

李由  
 毛瓠  
 洞木  
 舟泉  
 末山  
 其角  
 波村  
 風後  
 宗瑞  
 蕪村

# 火桶

霜のめち押子さけ火桶の系  
 さめろそと惚れ火おけのあそそ  
 朝暮を火桶よのこそをけけ  
 都あふぬ今好しもあふ相火おけ

芭蕉  
 湘竹  
 濂山  
 香言

# 火鉢

黒塚やほもひ女のまぐ火をち  
 うし終より圓居てんえぬ火鉢は  
 のまおとら斬止ぬとく火をちうお

言水  
 岸口  
 順水

# 湯婆

湯婆うら駒の出さるる手つたくれ  
 あんほうら羽こそなうられ暖る

涼菘  
 雨音



冬 採

冬 採  
子 採

冬 採  
子 採

山畑や昔みのこししてをかすへ  
冬をかまへ藪小椿の多いしら  
山里の笛主うとんえんて冬採  
妹う手に紙提やきし冬かみ人  
唐船の通ひハ多えくふち採  
炉開きの日瓜あし世の土菜うね  
うひくふや鼻をきくそ雨を笑  
炉あきまふや紙提よふ合のり  
あふ藪のよるけちきりや亥子餅  
三日月のとらふきやよ亥子うね  
子にのみてせかした三ツの肉の子我

去来 珍碩 和及 涼侖 嵐聖 子葉 其角 宗因 其角 昔丈

口 切

納 豆

子 始

口切の茶や常盤木の若みくま  
ムちきりや華折煎をきかいら  
はまりのやのしもの裏のふ員まさ  
はまりのまきくおひひや日本傷  
くら切や小賊下るうきまなふ終  
納豆とるとまねや嶺の雪お路一  
碓はきくて又の森きあや納豆一鳥  
数の子れかきもええり奉始  
師をきお一日ぬけぬふちとく先  
あとはしあ又や梅くら折くら

圃 正秀 西堂 求花 其村 大草 其角 之圃 路通 尚白



燧置

燧置やあまの月口ふ三輪組  
かみおきや守ふく海の巻むとひ

和及  
重厚

袴着

袴着を娘の子おもくはうぬ  
のみおたよまこはうまをや足牙

其角  
六亀

爐

爐の眠り浪をまきう杯須廣明石  
ろの隅ふ身を剛の神とらうれん  
淋しはやるろりの足のとくも念を  
かをめくは命はれたる搦の蟻  
ろの友や頼ふかきうは公翁面

言水  
秋之林  
山峰  
似方  
日下

搦

えつうや櫛よあまの海煙草  
榎木や風雅をくまう階の音  
面白の旅糸や搦を夜をさそく  
春ちうく搦はみうさる葉畑我  
お尼うをいの終中たて一夜の搦  
雄子鬼はるしうけらる搦月

鬼賈  
立三  
巴丈  
龜翁  
秀宿  
曉臺

炭竈

炭竈や煙をぬけの猿の声  
まみうはとあうて経よむ法師外  
炭うはのけりの橋や雲の浪  
まみ竈の口あまうからあまうり  
炭うまやけりかや風のおき

其角  
不炊  
之道  
龜洞  
子珊



炭

炭賣

冬かまへへ小儀やさみこめら  
炭焼や脆の清水鼻をえん  
まの火よ並ふまの光こそ  
小野とらふ名ふれされり炭俵  
片眼のまねりや炭のりゆるま  
雪う今朝炭のおとらぬその月  
炭をさむ音さく氷る森耳う形  
炭賣や隣け人う焚火ふゆ  
まのりも面うまうれる炭を  
すみ賣や宿小ひらりの眼とら

宗因 北枝 和賤 佑徳 詞山 嵐蘭 本草 温故 心流

冬の月

雪の恥をぬくもこるふの月  
雪よりのもさふ白髪よき乃月  
肝煎吐まをまれりふの月  
襟まはさ首引くまをまはけ交  
喰りのや門賣あらくふゆのつれ  
かこらふもいむ簀の戸やその  
れ一舟のぬまき一やふゆの月  
奥店や遠うらあまてふの月  
堀裏の桐の木さくらや冬の月  
足りともあふけてきくえれ月  
狼のかりま高まりふゆの月

具角 又草 曲翠 杉風 里圃 風園 素覧 里東 朱細 我眉 奚奠



寒月

志はくくと寒みを月の光の自  
みよりも氷の月をうらみたり  
を月や門なき寺の大高し  
寒く月や四糸の橋も我ひとり  
を声や手拍子かたけ川向ひ  
かんとあまの行くぬ橋をては漕ぎ  
寒く声の物ぬを笑ふ川を  
旅人けき声ゆや瀬田の橋  
をさるやあふ別を隣より  
かんとあまや山伏村の長けみ  
うむらあふ古ふ風を清くそ

土芳 鬼貫 蕪村 蝶夢 牧童 行露 知春 桃奴 暮子 仙杖 蕪村

寒夜

寒の又

寒垢離

臘八

眠

厂子や女よれくましく寒のハ  
鐘の声いこはをふる夜うね  
を垢離や上の町までありきり  
かんとあまよおのれ本間のそんま方  
臘八は愚癡を一日あけけを  
を臭き粥とくろりや我々腹  
瓶八や八瀬の勢も山をぬれ  
臘八や雪はあふりの迷ひを  
あうまの膏を染はるる葉を  
眠をひき冬せむや前于

風 幽 徒 考 知 荖 村 峯 及 諷 竹 尚 白 乙 由 既 白 木 導 惟 然



冬  
日

霜かけの道をふいては雪を丸け  
梅をどるよもよも雪かけも葉もさ

羽紅  
山川

冬  
夜

生壁小梅もふきの日向の奈  
冬の日のあけの袖をみのもねし我

沾徳  
言耻

冬  
夜

冬の夜やハコ半射の犬の声  
ゆめは秋の目のけ方や奥戸柵

勤也  
珍碩

風  
呂

日本の鳴ろふきとしく比叡山  
風呂吹やよの夜は夢の森に城  
千手井をふろゆき水汲すも我  
霍の毛や風呂ふきよら窓の中

其角  
琴風  
午寂  
闇指

吹

節

季

候

節季のゆめは風雅も師をうら  
節季のゆめは左りの耳小鳴門のま  
せりきゆめやせりき口のあぢひも  
節季のゆめに白うら米をくらねるり  
目ゆかたれゆめをゆきやせりきゆ  
節季のゆめをゆきとこふのねら那  
せりきゆめや抱えて通体園の前  
おとろけや念佛流生せりきゆ  
節季のゆめやちん天王寺御墓山  
節季のゆめや打揃ひゆく檜の上  
せりきゆめの拍子をぬくと明をうら  
節季のゆめを酒の心附をねらり

芭蕉  
其角  
路通  
田平  
一畑  
毛純  
露川  
宗因  
柴嚙  
挑後  
乙由



# 煤掃

煤くまふ己の棚沼の丈工の那  
 畑中のたよりの静やとととと  
 さく掃片山風うけと吹き通し  
 のう方へゆきとあそりんとくらひ  
 煤掃くゆから足らぬ家の内  
 家くくや飛の年きとと、はとひ  
 す、いまきの葉ふかくあ、救急や我  
 夜の火や不破の園玉のこく掃ひ  
 煤くまきーかーら瓜はくむ湊のみ  
 娘のーさ、とと家の朝まきしき  
 梅うえふらー後あつせやとと掃  
 民の家もよととあつととたり煤掃

芭蕉 嵐雪 大草 拳白 月下 祐甫 史邦 如行 黄逸 知足 百里 岸因

# 餅搗

# 衣配

弱法師我門ゆあせとちのれ  
 餅搗やありのか結る鶏のとや  
 一とせや餅はく白のこくととと  
 膝かーらとと餅のととととと那  
 りちつきふ小腹まきり癩疽中  
 餅はきくや白も薪小松くはー  
 ちち搗の手傳ひとととや小山伏  
 燭のちも後をさくととや衣くくとと  
 ころらの手をさくして出る衣死り  
 きぬらとりのらととぬ敷の九日ころ  
 師走さく一糸及のまぬととと

甚角 嵐紫 万子 東推 史邦 之道 馬佛 野坡 木守 望翠 野徑



市社

節分  
厄拂

年の市社をよぬらん羽織との  
長寄小唐物もなまきり市  
さりの市は母まき業やをけり  
彼一場へ人けとまふ所と一乃市  
我教もそ船の厄荷や年社市  
打まめも戸のあらかこの響る  
おられとや服小を門の鬼の面  
年をとる鬼は後へや焚ぬ豆  
くら返さるるやらふとよ厄拂  
聖よあもあのもりけむ厄ちふ

其角  
氷花  
トコ  
突奥  
麥林  
電翁  
荷兮  
其角  
重頼  
太祇

橋  
さうと

年  
忘

行  
手

下間くひくらきさせり居る  
橋や二十七夜のうら門は軒  
日のかり小塩あけ軒の齋の那  
奥のこのはるあきと年忘れ  
ひ燈を消せん扉のきりひき  
あつとこれあつとを鞭ひくか  
そは切のまう一はやとく  
行とりの空社際まらんそかき  
ゆく年やま賀造堂の新詔人  
お中しや伊勢は伊勢の糊細工  
ゆく年や木の葉交りのうら岸

巴山  
左圃  
桃隣  
芭蕉  
大草  
如柳  
宗因  
鬼貫  
詩六  
琴風  
沙明



年の瀬

とりの渡や漕を楫せどけ行ふ  
年終の渡やひらめ春心橋の物さひ

木山  
其角

流るる年

あの止ぬれうらな、年の淀みらん  
かろね、やふ手陀舞尼の年の所

素堂  
其角

妻の結

どりの火の籠よまま川の庵う那  
ままうらやことに女の髪の出ま  
雪うねる春まのりあは使の首

鬼貫  
同烟  
うく

岡見

岡見まると妹はくらひぬと人の門  
日のかく人まらぬ目のけあふの那

嵐雪  
言水

年籠

月もなまき枝のあふくやと一籠  
年ありの鏡は中々居りしより

召波  
曉臺

大晦日

揉みりひふ弄妓の涙や大晦日  
空の夜のけしきや三の曙  
おきくふまうこの年の一日うね  
助番や二十九日の大みそ  
さしの物もかきくた涙をとやなりのね  
年終夜と夏走らうとを俵のな  
一とまきりの啼くまらけー除夜のま  
山伏や出まそらりぬ除夜のやみ

末山  
去来  
仙化  
孟竹  
猿羽  
利合  
正秀



# 紫の昏

月雪とのさそりきつじとこの暮  
 股引や膝くら中きくく年のつれ  
 木綿買門の度路や坐しの暮  
 同かくをくおしもたけや年の昏  
 見りまてはてはあややとくは暮  
 時流をまうしはくせは暮暮暮我  
 如女も出うくくは暮やとくは暮  
 せりる子も親のかはえよ年の昏  
 坐しの暮とやめくを六余波う暮  
 天地は盛ん志暮やとくは暮  
 此れれもまご探かへくおねくは暮  
 采虫の石白めくは暮暮暮暮暮

芭蕉 千那 馬佛 曲翠 楚水 牧童 許六 思演 盧水 曲水 枚風 鉄下

# 年内 春立

舟の垢とは年の暮れ  
 年寄もまきねねりのや夜は昏  
 お奉行の名さへおちるは年つれね  
 くまてゆく年のまうけや伊勢惣世  
 猿猴の身小まごかや年れ昏  
 小傾城ゆきそまうんせくは暮  
 立年のうちまきとあさる春かきみ  
 日も八日なうしむとありと初のみ  
 去年ふれくくととからうけむ年の内  
 冬は真あつ流の外や梅のそな  
 うら船とも一首よみまの年の内

招因 東順 末山 去来 嵐雪 其角  
 貞室 来山 鬼貫 智月 乙由



小野の...  
 大野の...  
 日小の...  
 五平の...  
 小野の...  
 大野の...  
 日小の...  
 五平の...  
 小野の...  
 大野の...  
 日小の...  
 五平の...

唐本和事佛書石刻西經類  
 諸家以花板土賣抄部

京都市淺草區北東仲町五番地

書林 淺倉屋 吉田久兵衛



